

萬葉集の本文解釈学的研究  
-遣新羅使人歌群をめぐって-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2021-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 健司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21362">http://hdl.handle.net/10291/21362</a>

萬葉集の本文解釈学的研究  
——遣新羅使人歌群をめぐって——

山崎健司

## Hermeneutic Studies on the Text of the *Man'yōshū* Focusing on the *Waka* Group of the Missions to Silla

YAMAZAKI Kenji

The current work examines the *Waka* Group of the missions to Silla which comprise the 15<sup>th</sup> volume of the *Man'yōshū*.

The impetus for this group of poetry to be recorded in the *Man'yōshū* is usually thought to be that the deputy envoy Otomo no Minaka sent records of the poems composed at each point of anchor during the voyage to Otomo no Yakamochi.

However, there are various theories regarding how (by what process) the compiler interpreted and took down the poems read during the voyage by anonymous (or unknown) authors. The present researcher takes the stance that as a rule, anonymous poetry was from members of the mission of low rank which were read at each stop, and takes this supposedly anonymous work to be removed from the topic of inquiry, due the inability to conclusively confirm any facts about their compilers.

The current work limits its inquiry to the clearly 'historical' part (3612 to 3722), consisting of the poetry read at each point by members of the envoy supported by both formatted introductions and authorial annotations, and has removed the portion from the opening's farewell exchange *waka* group up to the collection of local works from consideration (3578 to 3611).

Through careful inspection of the situation described in detail by the prose introductions and glosses, the progress of the party in their voyage becomes clear through the scenes demarcated by stops in each point of anchor. Also, from the point in the voyage onwards from the accident in which a headwind set the group adrift, in each of the prose introductions explaining the state of the voyage at each stop, words expressing grief have been inserted, and through change therein, the troubles of the party experienced during the continuing journey are continuously emphasized in smaller units of *waka*, like a theme and variation in music. In each scene, members of the envoy both lament the passing of time, and continue expressing longing for their spouses, and the deepening state of their sorrow is expressed through the prose explanatory notes for each scene.

Also, when the subject of contiguous sub-groups of *waka* differ, places exist where the technique in which common elements are extrapolated from both preceding and succeeding poems, and used in the prose heading of a poem to form a connection has been used, and thus narrative incapable of being expressed solely by arranging poems is borne out by prose introductions.

To interpret, not only through poetry, but also through careful consideration of the format and content of prose introductions, the main theme of the *waka* group of the missions to Silla, 'meeting the wife in the autumn', the dynamic composition of this theme across the group has been made clear.

## 萬葉集の本文解釈学的研究——遣新羅使人歌群をめぐって——

山崎健司

## はじめに

近時、萬葉集の編纂の捉え方に關して、潮流が大きく変わってきた。身崎壽「万葉集卷七論序説」〔萬葉集研究〕第二十七集、塙書房二〇〇五年〕による構造分析Ⅱ共時態（靜態）分析と資料編成分析Ⅱ通時態（動態）分析とを融通無碍に混用することに対する批判、神野志隆光「歴史」としての『万葉集』——『万葉集』のテキスト理解のために〔『国語と国文学』八七卷一—号、二〇一〇年一月〕に代表される一連の論文によって、安易な動態分析による成立論的理解が否定されるようになる。拙著『大伴家持の歌群と編纂』（塙書房二〇一〇年一月）はその渦中に刊行されたが、そこでは個々の作品を制作時に詠作者が置かれた状況に即して解釈し、それらが歌卷の中でどのように位置づけられるか、詠作者と編纂者とが一致する大伴家持の日記的歌卷、萬葉集卷十七〜二十を中心として考察を行った。ここでは編纂にかかわって題詞・左注のありようを分析した結果、題詞や左注の書式を変化させることによって、時間・空間を異にする作品同士を内容的な関係性で結び付けていることが認められ、大伴家持が個々の作品の制作段階における意味とは別に、一定の期間において編纂段階

で読み直すことによって新たな意味を見出していたことを明らかにした。昨今、萬葉集の成立論的理解に対する批判的言辭を見ることが多いが、各巻で編纂方法を異にする萬葉集にあつて、大伴家持にかかわる部分においては、資料内外の情報にも比較的恵まれており、制作時点の意味と編纂時点の意味とを区別して「成立論」的に解説する意義は、なお十分に存在すると言つてよからう。

本稿では、卷十五を構成する「遣新羅使人歌群」をとりあげて考察を展開する。本稿がこの歌群をとりあげる理由は、詠作者である遣新羅使人（以下、使人と称する）たちが各地で詠んだ時点における歌の意味と、萬葉集卷十五の前半に一大歌群として置かれている編纂物としての意味との間に、大伴家持の日記的性格をもつ萬葉集卷十七〜二十と類似する要素が認められることによる。

この遣新羅使は天平八年六月に難波を出航、途中幾多の困難に遭遇しながら渡つた新羅では、「不受使旨」（『続日本紀』天平九年二月十五日条）という扱いを受けたばかりか、帰途対馬で大使阿倍継麻呂が死亡、副使大伴三中も病のため二か月ほど遅れて拜朝するという、悲惨な運命をたどつたことが知られている。この歌群が萬葉集に収録されるに際しては、副使であつた大伴三中から資料が家持側に渡つ

たとする見方が通説となっているが、作者不明歌の詠作者の捉え方、旅中に詠まれた歌の筆録者の捉え方も含めて諸説があり、今一度、前提を明確にしておく必要がある。そのうえで、歌群冒頭におかれた作者不明の悲別贈答歌十一首（三五七八〜八八）から、後半六首で柿本人麻呂歌との校異を示す当所誦詠古歌（三六〇二〜三六一一）に至る部分を考察の対象から外し、題詞や作者注記のありようから使人たちが各地で詠んだ体裁を明確にしている「実録」とされる部分に限定して、右に示した分析方法を応用しながら歌群の主題を明らかにしたい。

## 一 先行研究に対する本稿の立場

本題に入る前に、本歌群の詠作者、筆録者、編纂者について、先行する諸説を一瞥しておく。

まず、作者不明歌の詠作者については、単数説として、①一行中の無名氏（井上通泰『新考』、鴻巣盛廣『全釈』、土屋文明『私注』など）、②副使であった大伴三中（武田祐吉『全註釈』、迫徹朗「大伴三中と遣新羅使歌の主題」<sup>1</sup>、古屋彰「萬葉集卷十五試論」<sup>2</sup>）が想定されたが、九十六首に及ぶ作者不明歌を一人で制作したとは考えにくく、現在は③複数説（山田孝雄「萬葉集と大伴氏」、糸川定一「卷十五論」<sup>3</sup>、高木市之助「新羅へ」、藤原芳男「遣新羅使人等の無記名歌について」<sup>4</sup>、伊藤博「万葉の歌物語」<sup>5</sup>、井手至「柿本人麻呂の羈旅歌八首」<sup>6</sup>、吉井巖「遣新羅使人歌群」<sup>7</sup>、平舘英子「遣新羅使人の歌群——人麻呂歌の挿入——」<sup>8</sup>）が定説化している。

筆録者については、①録事・史生など一行中文書を取り扱った無名氏と見る説（井上『新考』、鴻巣『全釈』、土屋『私注』、井手「柿本

人麻呂の羈旅歌八首」<sup>14</sup>、吉井「遣新羅使人歌群」<sup>15</sup>、伊藤博「遣新羅使人歌群の原核」<sup>16</sup>、原田貞義「遣新羅使人等の歌」<sup>17</sup>）と、②副使の大伴三中と見る説（武田『全註釈』、窪田空穂「評釈」、山田「萬葉集と大伴氏」<sup>18</sup>、迫「大伴三中と遣新羅使歌の主題」<sup>19</sup>）が提出されている。しかし、すべての資料を同一人の手で筆録したかどうかは証明できず、いずれも可能性の域に留まる。

編纂者については、①大伴家持を想定する説（大濱巖比古「卷十五」<sup>20</sup>、吉井「遣新羅使人歌群」<sup>21</sup>）他、②大伴三中を想定する説（原田「遣新羅使人等の歌」<sup>22</sup>）他、③大伴池主を想定する説（後藤利雄「遣新羅使歌群の構成」<sup>23</sup>）がある。これについては、萬葉集卷十五の編纂以前に、航海の途上で一行中の某人により、歌稿を整理しながら部分的に歌を加えたり、注記を施したりする「編纂」に準ずる行為があった可能性も想定され、容易に決定できるものではない。

筆録者については特定することが困難だが、編纂者についてはすでに先行研究が題詞・左注に用いられている語句に、家持の使用例と一致または酷似するものがあることを指摘しており、遣新羅使人による歌の記録が萬葉集に組み込まれるに際し、主題の明確化を企図した「編集」作業が家持によって行われていた可能性は高い。ただ、先ほど述べたように、航海の途上で部分的に「整理」が行われた可能性も、遣新羅使人一行が悪天候のためにたびたび上陸したまま数日を過ごしていることを思えば、徒然を慰める営みとして十分にあり得る。また、遣新羅副使であった三中から家持へという歌稿の移動に関し、従来見落とされがちだったことだが、三中が帰朝したのは天平三年の正月、当時家持はまだ一九歳（養老二年誕生説による）で作歌活動の初期にあたることから、実際には坂上郎女あたりを経由して入手されたと解すべきかと推測される。そうだとすると、家持の関与を認める

場合、家持による編集が行われるまでに、歌稿を入手した人物、もしくはその人物を介して歌稿の内容に関心を持った某人によって「補整」が行われることも起こり得る。

したがって、本稿では、特定の人物による編纂という捉え方はせずに、題詞・左注の書式・内容と、それにかかわる歌の内容について、本文に即して分析を進めていくことにしたい。なお、「本文解釈学的研究」といういささか大仰な論題は、この観点を承けた命名である。

## 二 題詞・左注の内容から見た

### 遣新羅使人歌群実録部の展開

使人たちが航海の途中各地でうたった歌をもとに構成された、いわゆる「実録」とみなされる部分では、停泊した場所・時間帯・状況等を題詞に示し、詠作者のうち上位の身分の者は官職名、下位の者は無記名、中間的な身分の者は実名をそれぞれ左注に示すのを原則とする。全体の状況を見とやすために、まず歌の部分を除いて、題詞・左注のみをすべて挙げてみよう。なお、引用本文は『萬葉集CD-ROM版』（塙書房）により、△は小字、「」は注記、「題」は題詞の略、「左」は左注の略であることをそれぞれ示す。また、解説の便を考慮して、返り点を付し、長文の題詞には句読点を施した。

- 1 備後國水調郡長井浦船泊之夜作歌三首（三六一二～四題）  
右一首大判官（三六一二左）／左注なし（三六一三～四）
- 2 風速浦船泊之夜作歌二首（三六一五～六題）／左注なし「船」―  
「船」廣
- 3 安藝國長門嶋船泊磯邊作歌五首（三六一七～二一題）「船」―

「船」類・廣

右一首大石菘麻呂（三六一七左）／左注なし（三六一八～二一）

4 從長門浦船出之夜、仰觀月光作歌三首（三六二二～四題）  
／左注なし

5 古挽歌一首△并短歌△（三六二五～六題）

右丹比大夫悽愴亡妻歌（三六二五～六左）

6 属物發思歌一首△并短歌△（三六二七～九題）／左注なし

7 周防國玖河郡麻里布浦行之時作歌八首（三六三〇～七題）／左注なし

8 過大嶋鳴門而經再宿之後、追作歌二首（三六三八～九題）  
右一首田邊秋庭（三六三八左）／左注なし（三六三九）

9 熊毛浦船泊之夜作歌四首（三六四〇～三題）「船」―「船」廣

右一首羽栗（三六四〇左）／左注なし（三六四一～三）

10 佐婆海中忽遭逆風、漲浪漂流。經宿而後、幸得順風、到著豊前國下毛郡分間浦。於是、追怛艱難、悽惻作歌八首  
（三六四四～五一題）

11 右一首雪宅麻呂（三六四四左）／左注なし（三六四五～五二）  
至筑紫館、遙望本郷、悽愴作歌四首（三六五二～五題）

一云、美知之伎奴良思（三六五四左）／左注なし

（三六五二・五三・五五）

12 七夕仰觀天漢、各陳所思作歌三首（三六五六～八題）

右一首大使（三六五六左）／左注なし（三六五七～八）

13 海邊望月作歌九首（三六五九～六七題）

大使之第二男（三六五九左）／右一首土師稻足（三六六〇左）  
／一云、安麻乃乎等賣我、毛能須蘇奴礼濃（三六六一左）／

- 右一首旋頭歌也(三六六二左) / 左注なし(三六六三〜七)
- 14 到筑前國志麻郡之韓亭、船舶經三日。於時、夜月之光、皎々流照。奄對此華、旅情悽噫。各陳心緒、聊以裁歌六首(三六六八〜七三題) 西・温「此花」西は「花」ヲ朱テ消シテ「美」  
右一首大使(三六六八左) / 右一首大判官(三六六九左) / 左注なし(三六七〇〜三)
- 15 引津亭船舶之作歌七首(三六七四〜八〇題)  
右一首大判官(三六七四〜五左) / 左注なし(三六七六〜八〇)
- 16 肥前國松浦郡狛嶋亭船舶之夜、遙望海浪、各慟旅心一作歌七首(三六八一〜七題)  
右一首秦田麻呂(三六八一左) / 右一首娘子(三六八二左) / 左注なし(三六八三〜七)
- 17 到壹岐嶋、雪連宅滿忽遇鬼病、死去之時作歌一首ハ并短歌(三六八八〜九六題)  
右一首挽歌(三六八八〜九〇左) / 右一首葛井連子老作挽歌(三六九一〜三左) / 右一首六鯖作挽歌(三六九四〜六左)
- 18 到對馬嶋淺茅浦船舶之時、不<sub>レ</sub>得順風、經停五箇日。於是、瞻望物華、各陳慟心一作歌三首(三六九七〜九題) / 左注なし
- 19 竹敷浦船舶之時、各陳心緒作歌十八首(三七〇〇〜一七題)  
右一首大使(三七〇〇左) / 右一首副使(三七〇一左) / 右一首大判官(三七〇二左) / 右一首少判官(三七〇三左) / 右二首對馬娘子名玉槻(三七〇四〜五左) / 右一首大使(三七〇六左) / 右一首副使(三七〇七左) / 右一首大使(三七〇八左) / 左注なし(三七〇九〜一七)

20 廻来筑紫、海路入京、到播磨國家嶋之時作歌五首(三七七八〜三三題) / 左注なし

1〜20に挙げた題詞は、「備後國水調郡長井浦」、「風速浦」、「安藝國長門嶋」のように、一見すると不統一のようだが、通過した場所について、新たな国に入つて最初の停泊地には郡名を記載する原則が採られているらしい(1・7・10・14・16)。

ただし、2の「風早浦」については問題がある。『代匠記』や『萬葉考』では備後とし、『略解』や『古義』は「和名抄」の「高田郡風速郷「加佐波也」」の存在を指摘するものの、『全釈』が「高田郡は安芸の東北隅の山地で、海に臨んでゐない」(傍点筆者)として以降、この説が支持されている。その場合、2の題詞に「安芸国」と書かれなければならないわけで、そこに問題が生じてくる。これについては、この題詞の下に掲載される、

我が故に妹嘆くらし 風早の浦の沖辺に霧たなびけり(三六一五)  
沖つ風いたく吹きせば 我妹子が嘆きの霧に飽かましものを(三六一六)

の二首に関して、つとに『拾穂抄』が「君がゆ海辺の宿に霧立たばあが立嘆くいきと知ませとよめるを思ひ出たる」と冒頭部悲別贈答歌群中の三五八〇との内容的な関係を指摘したが、伊藤博「悲別贈答歌群」は安芸の国名がないのは「霧を靡かせ霧を呼ぶ『風速』の名に興をひかれて整理者家持が創り添えた」ためと判断してこの二首を実録部から除外、さらに吉井巖『全注卷第十五』は瀬戸内海の高霧が夏には発生しにくいことを指摘して、題詞のみならず歌にも問題が指摘

されている。やはり、この部分には編者の手が入っているであろう。この位置に霧を詠む二首がおかれたのは、実録を資料としない冒頭部と実録を基にする部分とを接合する際に、主題を再現させて提示することが意図されたものと推測される。

なお、3の「安藝國長門嶋」に郡名が記載されていないことについては、17「壹岐嶋」、18「對馬嶋」、20「播磨國家嶋」と同じく、島において郡名は記載しない方針があったとみられる。ただし、16「肥前國松浦郡狛嶋」については、唐津湾の西北のはずれに位置する神集（かしわ）<sup>(26)</sup> 島とみられ、島でありつつ郡名を記載しているが、ここは九州本島から大陸に向かう拠点であった唐津に近く、交通の要衝として「亭」を備えていることから、他とは異なる表記がとられたものと考ええる。

また、船を停泊させて上陸した場所には「船泊」と表記することも一貫している。「船」は古辞書に「船、海中大船」〔広韻〕入声二十陌、「船、菩各反大船」〔篆隸万象名義〕舟部 などとあるように、大きな船の意。遣新羅使一行を乗せた船の表記は「船」がふさわしい。なお、3について、『補訂版萬葉集本文編』（塙書房）、『新編全集』（小学館）は校訂に際して類聚古集・廣瀬本の「船泊」を採用しているが、類聚古集・廣瀬本ではこの歌群において「船泊」と「船泊」とが混在しており、3のみを「船泊」とする理由がよくわからない。他の例が「船泊之夜」（1・2・9・16）、「船泊之時」（18・19）などと書かれているのに対し、「船泊磯邊」作歌<sup>(27)</sup> は書式が違くと判断したのかもしれないが、4「從長門浦船出之夜」、14「到筑前國志麻郡之韓亭船泊経三日」、15「引津亭船泊之作歌」に照らして、3も「船泊」とあって然るべきである。なお、7で「周防國玖河郡麻里布浦行之時」とあるのは、

ま楳貫<sup>かぢぬ</sup>き船し行かずは 見れど飽かぬ麻里布の浦に宿りせましを

(三六三〇)

大船にかし振り立てて 浜清き麻里布の浦に宿りかせまし

(三六三二)

から窺えるように、この地には上陸せずに先を急いだことを反映したもので、原則は貫かれているとみてよい。

左注には詠作者名のほか、異伝（11・13）、歌体（13）が記載される。詠作者名について、記載がある歌数は三一、記載がない歌数は八〇で、記載のない箇所割合が七二%とかなり高い。そこで詠作者名の記載がない部分に、編纂の段階で編者の手によって補われた歌が含まれているのではないかとの議論が生じてくる。13の「右一首旋頭歌也」（三六六二左）という左注による歌体の表示はこのみであるが、三六一二と三六五一には脚注形式で「旋頭歌也」と記されている<sup>(28)</sup>。

さて、題詞・左注のありようを仔細に観察すると、そこから一行の旅の状況がいくつかの場面を区切る形で浮かび上がることが分かる。

1〜9では異質な5・6・8を含んではいるものの、内海を計画的かつ順調に航行している様子が、各停泊地、通過地での様子を描くことによつて明らかにされる。一方、10の題詞は、思いがけぬ逆風に遭い、漂流して想定外の地に漂着したことが大きな事件として強調されているのは勿論だが、1〜9と対照されることにより、歌群全体の流れの上でも転機を示している。11〜13は筑紫館から博多湾一帯で数日間滞在した時の詠を集めた部分で、天候あるいは何らかの事情により、先に進めずにいる一行の様子が、他の部分とは内容を異にする題



詞によって明らかにされる。そして、航海を再開した14以下では、14「船泊経三日」、18「不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>順風<sub>一</sub>経停五箇日」など、地形的に波が穏やかな15「引津亭」を除く各停泊地で、悪天候に阻まれている様子が強調されている。苦難の状況は、天候によるものばかりではない。17では壱岐島に着くと、10で唯一詠作者名が明記されていた雪宅満（宅麻呂）が「忽遇<sub>二</sub>鬼病<sub>一</sub>死去」したことが示され、決定的になる。

このような航海の状況と並行して、10で「悽惻」の語が用いられてから後は、11「悽愴」、14「悽噎」、16「各働<sub>二</sub>旅心<sub>一</sub>」、18「各陳<sub>二</sub>働心<sub>一</sub>」に見られるごとく、一行の旅中の悲哀を表す語に変化をつけて、変奏曲のように小歌群単位でくり返し強調されていくのである。

### 三 瀬戸内海航行中（1～9）の

#### 同質な部分と異質な部分

前節では、題詞の書式を比べ、停泊地を明記する題詞群の中で、5「古挽歌一首<sub>ハ</sub>并短歌<sub>ノ</sub>」（三六二五～六題）・6「属<sub>レ</sub>物發<sub>レ</sub>思歌一首<sub>ハ</sub>并短歌<sub>ノ</sub>」（三六二七～九題）・8「過<sub>二</sub>大嶋鳴門<sub>一</sub>而経<sub>二</sub>再宿<sub>一</sub>之後追作歌二首」（三六三八～九題）は異質と認定した。8は停泊地の代わりに通過地を記していることから、停泊地を明記する題詞群に準じて考える余地を残しているが、ひとまず異質なものとして取り上げておく。

#### （1）停泊地を明記する小歌群

これら異質なものがどのような経緯でそれぞれの場所に入って来たのかを考察する前に、停泊地を明記する点で質を同じくする瀬戸内海航行中の小歌群の内容を一瞥しておきたい。なお、歌の引用に際して

は、歌意を明示すべく適宜漢字を宛てて示す。

#### 1 備後國水調郡長井浦船泊之夜作歌三首

あをによし奈良の都に行く人もがも 草枕旅行く船の泊り告げむ  
に「旋頭歌也」 (三六一二) 大判官

海原を八十島隠り来ぬれども 奈良の都は忘れかねつも

(三六一三)

帰るさに妹に見せむに わたつみの沖つ白玉拾ひて行かな

(三六一四)

#### 2 風速浦船泊之夜作歌二首

我がゆゑに妹嘆くらし 風早の浦の沖辺に霧たなびけり

(三六一五)

沖つ風いたく吹きせば 我妹子が嘆きの霧に飽かましものを

(三六一六)

1では第一首（三六一二）と第二首（三六一三）が「奈良の都」を繰り返すことよって望郷の念を深め、第三首（三六一四）で現地の手で採れる白玉（真珠）を家づとにしようとうたって望郷の念を収束させる。2の題詞は本来入るべき国名「安藝國」がないことを除けば、1のそれと同一の書式である。この部分は、さきに述べたように、後の補入の可能性が考えられるところだが、歌は「風速」の地名から霧を妻の嘆きの息に見立てている。これらはいずれも望郷のテーマで貫かれている。

一方、3の題詞は「安藝國長門嶋船泊磯邊」作歌五首」となっており、「磯邊」であることが強調されている。

石走る滝もどろに鳴く蟬の声をし聞けば京師し思ほゆ

(三六一七) 大石蓑麻呂

山川の清き川瀬に遊べども 奈良の都は忘れかねつも(三六一八)  
磯の間ゆたぎつ山河絶えずあらば またも相見む秋かたまけて

(三六一九)

恋しげみ慰めかねてひぐらしの鳴く島蔭に慮するかも(三六二〇)  
我が命を長門の島の小松原 幾代を経てか神さびわたる

(三六二二)

この地では二泊したらしく、『釈注』によれば、次の予定地麻里布(岩国)では一夜を船中での仮泊ですませ、名だたる難所大島の鳴門を真昼に通過しようとしたため、すなわちその次の宿泊予定地熊毛の浦(室津)まで、仮泊や難所を挟んで約八〇キロの大航路に及ぶため、ここで英気を養ったと推測されるという。実際、長門の島(倉橋島)の景観は、深い湾の奥に白砂青松の桂が浜が穏やかに広がり、背後には奇岩が連なる火山(ひやま・標高四〇八メートル)が聳え、山の中腹から流れ下る清流も見られるなど、変化に富み、人を惹きつけるものがある。そのような場所で詠まれた歌の内容は、「石走る滝もどろに鳴く蟬の声」(三六一七)、「山川の清き川瀬に遊べ」(三六一八)、「磯の間ゆたぎつ山河」(三六一九)、「ひぐらしの鳴く島蔭」(三六二〇)、「小松原幾代を経てか神さびわたる」(三六二二)のように、昼間の情景をさまざまな観点から描き、現地の風光を楽しむ余裕すら感じられる点は、前後の小歌群と趣を大きく異にする。しかし、島の風景に事寄せてうたわれるのは、「都し思ほゆ」(三六一七)、「奈良の都は忘れかねつも」(三六一八)、「またも相見む秋かたまけて」(三六一九)、「恋しげみ慰めかねて」(三六二〇)のように、1・2と

同じく望郷の念であり、「またも相見む秋かたまけて」(三六一九)のように秋の再会を期して先を急ぐ姿勢であった。

4の題詞は「從長門浦船出之夜、仰觀月光作歌三首」とあって、月明かりを利用した航海であることを示す。

月詠の光を清み 夕なぎに水手の声呼び浦み漕ぐかも(三六二二)  
山の端に月傾けば 漁りする海人のともし火沖になづさふ

(三六二三)

我のみや夜船は漕ぐと思へれば 沖辺の方に楫の音すなり

(三六二四)

第一首(三六二二)では月光と夕風、第二首(三六二三)では山の端に傾いた月光の心細さ、第三首(三六二四)では闇の中での航海、と三首それぞれ異なる時間帯に詠まれており、時間の経過とともにのる航海の心細さを述べている。三首は無記名だが、航海の特殊性をうたっている点から見ても、編者による添加は想定しにくい。

なお、ここには1・3に見られた望郷の主題は出て来ず、船上の旅愁が主題となつている。題詞の「仰觀月光作」は三六二二・三六二三に係り、三六二四には係わらないように見えるが、「月光を求めて仰ぎ観」つつ航海を続けている一行にとつて、三六二四では仰ぎ観ても月は無く、頼るものが何もない状態になっていることが浮かび上がるように仕組まれているのであろう。

#### 7 周防國玖河郡麻里布浦行之時作歌八首

真楫貫き船し行かずは 見れど飽かぬ麻里布の浦に宿りせましを

(三六三〇)

いつしかも見むと思ひし安波島をよそにや恋ひむ 行く由をなみ

(三六三二)

大船にかし振り立てて 浜清き麻里布の浦に宿りかせまし

(三六三三)

安波島の逢はじと思ふ妹にあれや 安寐も寝ずて吾が恋ひわたる

(三六三三)

筑紫道の可太の大島 しましくも見ねば恋しき妹を置きて来ぬ

(三六三四)

妹が家路近くありせば 見れど飽かぬ麻里布の浦を見せましもを

(三六三五)

家人は帰り早や来と伊波比島齋ひ待つらむ旅行く我を(三六三六)

草枕旅行く人を伊波比島 幾代経るまで齋ひ来にけむ(三六三七)

まず題詞に「船泊」ではなく「行」と書かれている点が注意されるが、これは第一首の「船し行かずは」と「宿りせましを」とによって、麻里布では上陸しなかったことを窺わせていることと対応している。上陸せずに素通りしていくのは、広島湾の潮流について詳細に考察を加えた『全注巻第十五』(一〇〇～三頁)によれば、難所として知られる大島の鳴門を通過するのは「日中の航海でなければならなかった」からだと言われ、長門浦(倉橋島)を午後四時半ごろ出航すると潮流の関係でいったん北流し、厳島南方の阿多田島の北方で午後八時前に憩流となり、西に転流したのち緩やかな南流によって麻里布の浦には午後十時半ごろ着船、翌朝午前七時半ごろに麻里布の浦を出航して大島の鳴門に向かったと推定している。

八首は『古典集成』が指摘するように、四首ずつで二つの組をなし、「素通りしてゆく心残りを通して旅先の土地を讃める歌を並べ、

望郷歌で結ぶ」前半四首と、「前歌(筆者注、三六三三)の妻恋しさを承けて望郷歌を並べ、旅先の土地を讃める歌で結ぶ」後半四首という構成になっている。旅先を讃める三首と望郷歌一首の前半四首と、望郷歌三首と旅先を讃める一首とが鮮やかなコントラストを示すのは、『釈注』によれば、「第一組の第四首が完全に妻恋しい歌になっていることに影響されたからで、したがって、第二組は第一組にきびずを接して歌い継がれた」のだという。

ただし、前半には「安波島」(三六三一・三三三)、後半には「可太の大島」(三六三四)、「伊波比島」(三六三六・三七七)という島の名が詠まれているが、いずれの島も現在の岩国市室の木町の海岸付近に比定される麻里布付近には存在しないため、諸説を生んでいる。

安波島に関しては「いつしかも見むと思ひし安波島」(三六三二)とあることによれば、通説のように「早く見む」に逢ハムの意を響かせてアハ島と言ったことは動かないだろうが、次の通過地「大島(オホシマ)」を「アハシマ」と呼びなしたのではないかとする『釈注』の新説は、大島の通過時刻にこだわって麻里布に上陸しないでいる事情を考慮すればありうることであり、「可太の大島」についても「筑紫道の」に続くことから『新考』が説き、『全注』が従うところの「方向」説、すなわち筑紫路に向かう方にある大島と解すれば、一同の関心事にちなむ地名として、麻里布の浦から見えなくても、自然に出てくるものと推測される。

ところが、「伊波比島」については、『新考』以下、山口県熊毛郡上関町の祝島に比定されており、その場合、次に掲げる9の「熊毛浦」の付近となって、麻里布からは大島の背後にある室津半島やその西にある長島のさらに西方に隠れる位置にある。そこで何故この地名がうたわれたのが問題となる。『全注』は「まだ通過しておらず、見え

もしていない島を、ここで歌に詠むのは不審である」として、配置換えされてこの位置にきたとする。本稿は『全註釈』の「これから西方は茫茫たる周防灘にさしかかるから、特にこの島の神を祭って行ったので、伊波比島の名があるのだろう」という解釈を参考に、瀬戸内航海において大島が難所として知られていたのと同様に、周防灘の入口にあたる祝島も航海関係者には知られており、大島の次なる目標の地名として記憶されていたものが、身を慎んで祈る意のイハヒに掛けて表現されたものではなかったかと考えたい。

### 9 熊毛浦船舶之夜作歌四首

都辺に行かむ船もが 刈り薦こもの乱れて思ふこと告げやらむ

(三六四〇) 羽栗

暁の家恋しきに 浦廻うらみより楫の音するは海人娘いかも(三六四一)

沖辺より潮満ち来らし 可良の浦に漁りする鶴たづ鳴きて騒さわぎぬ

(三六四二)

沖辺より船人のぼる 呼び寄せていざ告げ(都氣) 遣らむ旅の

(三六四三)

宿りを

9の題詞は、停泊地を明記する題詞の通例と何ら変らないが、「熊毛」は『和名抄』に「周防国熊毛郡熊毛「久万介」とあり、7の「玖河郡」を承けて省略したのではなく、本来「熊毛郡熊毛浦」とあるべきところ。歌の内容を見ると、「都辺に行かむ船もが」とうたい起こす羽栗作の第一首(三六四〇)は、実録部の冒頭三六一二と同工異曲。これを承けて「暁の家恋しきに 浦廻より楫の音するは海人娘いかも」(三六四一)、「沖辺より船人のぼる 呼び寄せていざ告げ遣らむ旅の宿りを」(三六四三)と船にかこつけて郷愁をうたう。

ただし、第四首(三六四三)の本文・異文の「告げ」のゲに万葉の通用仮名である「氣」が用いられて、紀行歌録である三六一二・三六七六の「告げ」に用いられている「尋」とは異なっている点に不審が残ると『釈注』が指摘、また、第三首(三六四二)では可良の浦で餌をあさる鶴の声をうたう。鶴について、『全註』は「十月下旬に飛来し、三月上旬に去るタツが真夏の本州にいるはずがない」として、鶴の鳴くことがうたわれている歌は「使人の作とは考えない」とする。このように後半の二首には疑問が残るが、郷愁をうたった第一首(三六四〇)の作者羽栗は実在した使人の名前であり、題詞の「船舶之夜」をふまえるならばうたわれた時間は夜半前と解するのが自然、第二首(三六四一)は第一首にうたわれた郷愁を寢覚めの時間帯に覚えつつ、旅先の海人娘子の活動に思いをはせる現地讚美の歌で、最低限この二首は実録として存在したものであろう。ちなみに、後半は第二首の「浦廻」からの音に対し、第三首は「沖辺」からの音で承け、第四首はその「沖辺」に船影を見るように展開し、徐々に夜が明けていくように歌が配列されている。

以上、停泊地を明記する小歌群の内容の確認を試みた。個々の停泊地がもつ地理的特性や地名、あるいは航海の状況をきっかけとして小歌群ごとに特徴を形づくっているもの、旅先への讚美や家郷への思慕をうたいあげる羈旅歌の類型の範疇に収まっていることが確認できる。

## (2) 異質な作品群

さきに停泊地を明記する題詞が連続する、使人たちが各地で詠んだ歌に基づく「実録」とされる部分の題詞の内容を比較した結果、5

「古挽歌一首へ并短歌」(三六二五～六題)、6「属物發」思歌一首へ并短歌」(三六二七～九題)、8「過大嶋鳴門而経」再宿之後追作歌二首」(三六三八～九題)の三つは異質と認定された。これらは実録部の中で、どのような役割を担っているのだろうか。

### 5 古挽歌一首へ并短歌

夕されば葦辺に騒き 明け来れば沖になづさふ 鴨すらも妻とたぐひて 我が尾には霜な降りそと 白たへの翼さし交へて うち払ひさ寝とふものを 行く水の帰らぬごとく 吹く風の見えぬがごとく 跡もなき世の人にして 別れにし妹が着せてし なれ衣袖片敷きてひとりかも寝む (三六二五)

#### 反歌一首

鶴が鳴き葦辺を指して飛びわたる あなたづたづしひとりさ寝れば (三六二六)

#### 右丹比大夫懐「愴亡妻」歌

この歌は、挽歌というよりは羈旅歌に近い表現をとり、窪田『評釈』は「此の歌は明らかに旅愁であつて、挽歌ではない。これを挽歌としたのは編集者の誤解」と説く。また、『全注』は左注の「懐愴」の語に着目し、「懐」およびその熟語は、卷十五の題詞、左注のなかの、記録者の原表記に加えられた、編集時の添加部分、および、大伴家持の記述によると思われる部分に、集中して存在している」と指摘し、この歌は船旅で吟誦されたものではなく、後に添加されたと捉える。

このように、編集段階で補入・添加されたと捉える説が提唱される中であつて、平舘英子「古挽歌」は、三六二五の末尾が挽歌より羈

旅歌に重なる表現となつている点に着目し、「妻との死別は(中略)相間的情緒の下での別れ、つまり、羈旅による離別に通底するものと捉えられ、旅愁の表現に結び付いた」と指摘、また題詞に「古挽歌」とある点については、「公的な旅にあつて、妻を失つた体験を踏まえた哀傷に旅愁とを重ねて表現し、人に贈つた作という作歌事情」を想定する。左注の「懐愴」については、三六五二題詞、三八〇四題詞、梁・江文通「雜体詩三十首・潘黃門(述哀)岳」(『文選』卷三十一)の例より、「悲しみ、いたむ」意であるが、旅愁、嘆きそして時間の経過した哀悼の情をさす語としてあることを指摘する。

「編集者の誤解」という解釈は誤字説と同様、安易に持ち込むべきではなく、「懐」およびそれを含む熟語が家持の記述に多く見られるからと言つて、それは題詞・左注の次元であり、歌も編集段階で書き加えられたと見るのは早計であろう。実録として遣新羅使人が伝えた資料の一部に、編者が加筆することも想定しうるからである。まずは平舘氏のように題詞と歌の表現とが結びつくかどうかを確認すべきであろう。そうして、挽歌の表現として本来作られた歌が、何ゆえ長門浦出航後の位置に配列されているのか、その必然性を考えるのが取るべき順序である。

歌群中この位置で「古挽歌」がうたわれたことについては、『新考』が「前の三六二三の歌の『沖になづさふ』から連想して誦したものであらう」と説くように、きっかけは直前の4「從長門浦・船出之夜仰觀月光作歌三首」の第二首「漁りする海人のともし火沖になづさふ」から「なづさふ」の語を介して「夕されば葦辺に騒き 明け来れば沖になづさふ鴨」という「古挽歌」の表現を想起したものと推測される。そして、遣新羅使人たちの4における夜の船出と航海のさまを重ね、自分たちの境遇を鴨と比較するとともに、「行く水の帰らぬ」

とく 吹く風の見えぬがごとく 跡もなき世の人」という「古挽歌」の表現に航海を続ける自分たちを重ねて、瀬戸内海の難所の一つとして知られる周防大島の大島瀬戸を程なく通過することへの覚悟を込め、「別れにし妹が着せてしなれ衣 袖片敷きてひとりかも寝む」の結びに4ではうたわれていかなかった望郷の思いを込めて、穏やかな風光に包まれて二日間を過ごした長門浦を出航して麻里布の浦に到着するまでの間に、実際にうたわれたものが記録されたのであろう。

### 6 属物發<sup>レ</sup>思歌一首へ并短歌<sup>▽</sup>

朝されば妹が手に巻く 鏡なす御津の浜びに 大船に真楫しじ貫き 韓国に渡り行かむと ただ向かふ敏馬を指して 潮待ちて水脈引き行けば 沖辺には白波高み 浦廻りより漕ぎて渡れば 我妹子に淡路の島は 夕されば雲居隠りぬ さ夜更けて行くへを知らに 吾が心明石の浦に 船泊めて浮き寝をしつつ わたつみの沖辺を見れば いざりする海人の娘子は 小船乗りつららに浮けり 暁の潮満ち来れば 葦辺には鶴鳴きわたる 朝風に船出をせむと 船人も水手も声呼び にほ鳥のなづさひ行けば 家島は雲居に見えぬ 吾が思へる心なぐやと 早く来て見むと思ひて大船を漕ぎ我が行けば 沖つ波高く立ち来ぬ よそのみに見つつ過ぎゆき 玉の浦に船をとどめて 浜びより浦磯を見つつ 泣く子なす音のみし泣かゆ わたつみの手巻きの玉を家づとに妹にやらむと 拾ひ取り袖には入れて 返しやる使なければ 持てれども験を無みとまた置きつるかも(三二二七)

### 反歌二首

玉の浦の沖つ白玉拾へれどまたそ置きつる 見る人を無み

(三二二八)

秋さらば我が船泊てむ 忘れ貝寄せきて置けれ沖つ白波

(三二二九)

6の長歌は《御津》―《敏馬》―《淡路の島》―《明石の浦》―《家島》―《玉の浦》のように、行程順に地名を詠み込み道行の形をとる点、長門浦を出発した後に位置しながら、来し方をふり返る点に特徴がある。このような地名への関心は、5の「古挽歌」には見られない。これと類似する歌に「丹比真人笠麻呂下筑紫國」時作歌一首へ并短歌<sup>▽</sup>(五〇九―一〇)があり、井上通泰「丹比笠麻呂」は直前の「古挽歌」の左注に「丹比大夫」と書かれていることと関連づけ、属物發思歌「は笠麻呂の五〇九歌をふまえた」と説き、『私注』や清水克彦「丹比笠麻呂の道行的望郷歌」が同様に捉えている。いま左に「丹比真人笠麻呂下筑紫國」時作歌」の長歌を示してみよう。

臣の女の匣に乘れる 鏡なす御津の浜辺に さにつらふ紐解き離けず 吾妹児に恋ひつつ居れば 明け晚れの旦霧隠り 鳴く鶴の哭のみし泣かゆ 吾が恋ふる千重の一隔も なぐさもる情も有りやと 家のあたり吾が立ち見れば 青旗の葛木山に たなびける白雲隠る 天下がる夷の国辺に 直向かふ淡路を過ぎ粟嶋を背がひに見つつ 朝なぎに水手の音喚び 暮なぎに梶の聲為つつ 浪の上をい行きさぐくみ 磐の間を射行き廻り 稲日都麻浦みを過ぎて 鳥じものなづさひ去けば 家の嶋 荒磯の上 打靡き四時に生ひたる なのりそがなごも妹に告らず 来にけむ(五〇九)

先行研究が指摘するように発想や用語に顕著な類似が認められる

が、地名に関しては、枠で囲んだ三つが6と一致している。

一方、伊藤博「遣新羅使人歌群の原核」<sup>(36)</sup>は、「属物発思歌」における難波の御津から玉の浦までの行程が、家持が別途資料によって大幅に手を入れた部分と認められる冒頭部の、左注に「乗船入海路上作歌」と記す八首（三五九四～三六〇二）における「玉の浦」を詠む第五首までの行程に対応すると指摘し、吉井巖「遣新羅使人歌群」<sup>(37)</sup>は、末尾の「家島五首」（三七一八～二二）が「御津」「淡路島」「家島」の順序を逆向きにして展開していることを根拠に、「属物発思歌」と「家島五首」とを家持の追加とみなしている。伊藤説が指摘する「属物発思歌」と「乗船入海路上作歌」との対応は地名の上では顕著でなく、地名が一致するのは「玉の浦」のみである。「御津」は八首の歌群の直前「右三首臨發之時作歌」と左注に記す三五九一～三の第三首にもあり、「敏馬」は八首の直後「当所誦詠古歌」の三六〇六の人麻呂歌集との校異に、「明石」は同じ歌群の三六〇八に現れているので、「乗船入海路上作歌」との対応というよりは、使人出航以降、実録の直前までの複数の資料に出てくる地名と関連づけられていると見るべきであろう。吉井説の「家島五首」の構成との対応については問題ない。

使人の実録として残されていたとみられる「古挽歌」と、遣新羅使人歌群の冒頭部と末尾部（家島五首）の双方を関連づけながら家持によって実録とは別途に制作されたとみられる「属物発思歌」とがいかにかかわるかと言え、やはり「丹比大夫」の注記がきっかけになっているのだろう。井上「追攷」は「笠麻呂の下筑紫国時歌を知る」属物発思歌の作者が「古挽歌」を載せたように理解しているようだが、使人一行の中に「丹比大夫」の「古挽歌」を知る者がいて実際に誦詠されたものが記録され、それを後に読んだ遣新羅使人歌群をこん

にち見る形に創りあげた編者（おそらく家持）が、笠麻呂の「下筑紫國時作歌」と使人たちの航路が重なっていることに興味を抱き、それを下敷きにしながらか歌群全体に響きあうように制作したのが「属物発思歌」であったと捉えるべきで、6は実録としては存在しなかったと考えられる。

8「過大嶋鳴門」而経「再宿」之後追作歌二首」について、「大嶋鳴門」は周防大島の大島瀬戸、「経再宿之後」は『篆隸万象名義』（ウ部）に「宿、思陸反、夜也、豫也、安也、…、留也、素也」とあって二夜を経て後の意。「追作」は追ヒテ作ル、すなわち後から思い出して作る意、二首のうち第一首は田邊秋庭、第二首は無記名である。歌は、

これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海女娘子ども

（三六三八）

波の上に浮き寝せし宵あど思へか心がなしく夢に見えつる

（三六三九）

というものだが、秋庭の歌（三六三八）は鳴門の渦潮の傍で玉藻を刈っている海女を見て驚く内容、第二首（三六三九）は上陸せずに海上で夜を明かした麻里布沖で夢枕に妻が現れたときの切なさを回想しうたったもの。「浮き寝」は船上泊を示す語で、当事者でなければ使用することはありえない。二首の歌を読むかぎりでは、題詞の「再宿之後」に詠まれたことを窺わせる言葉はみられず、この題詞もまた当事者でなければ書けない内容である。

もっとも、「再宿之後」について「釈注」が「時間の上では、次の熊毛浦での歌よりのちの詠」である点を指摘していることが注意される。時間に重きをおくならばこの位置を占めることはなく、この題詞

は書式の上でもやや通例と異なるけれども、「大嶋鳴門」という場所が重要であったことを示していよう。大島瀬戸はこんにち瀬戸内海と広島港や呉港を結ぶ最短のルートとして多くの船舶が行き交っているが、潮汐の干満差が大きいうえに海峡は狭く、地形が複雑なため、潮流も速く複雑になる。狭い海峡に多くの船が行き交うことになるので、日中通過しなければならぬのである。使人たち一行にとつて、周防大島の鳴門を無事に通過することがいかに重大事であったかを、この題詞は示している。

なお、第一首の「これやこの」は、

これやこの大和にしては我が恋ふる紀伊道きいちにありといふ名に負ふ  
背の山 (三五)

のように、噂で知っていた事柄が眼前に現れたときの驚きの表現の型であり、「追作」であることとどのようにかかわるかが問題である。第一首は大島の鳴門を通過中に目に触れた情景を詠んだものである。第二首は「波の上に浮き寝せし宵」から回想の表現であることが知られ、これは「追作」にふさわしく、難所を通過し、しばらく時間が経過して安定した航海になってから、通過前の不安だった状況をふりかえっているであろう。

筆者はかつて現地の情景を詠む第一首と望郷をうたう第二首とが組み合わされていると考え、想像を含むことを断ったうえで、「第一首は大島の鳴門を通過する際に作られ、後に第二首が作られる場面でも通過地の珍しい情景を話題にしながら再度誦詠された」可能性を述べたことがある<sup>34</sup>。今もその可能性は残しつつ、別案として二首を同時に誦詠する場合は想定せず、大嶋鳴門を通過する前の心情を反映した望郷

歌である第二首と、秋庭が通過時点で詠んでいた現地讚美の第一首とを編纂時点で組み合わせ、「大嶋鳴門」に関する羈旅歌群とした可能性もあるのではないかと考えている。

真相を解明する材料が乏しいのが残念だが、遣新羅使人歌群全体から8の題詞と歌とを捉え直してみると、順調な航海中の停泊地ではなく、緊張と不安の中で通過したこと、そこから二日が経過して、振り返ることができる程度に心情的に余裕が出てきたことを表しているように読める。それは、時間的にはすぐ後に続く、10の「佐婆海中忽遭<sup>二</sup>逆風<sup>一</sup>、漲浪漂流経宿」における苦難の大きさを際立たせる伏線になっっているようにも思われる。

以上、本節では、停泊地を明記する題詞群の中で、異質と認定された5・6・8についてそれぞれ歌の内容を検討した。その結果、5「古挽歌一首ハ并短歌V」と8「過<sup>二</sup>大嶋鳴門<sup>一</sup>而経<sup>二</sup>再宿<sup>一</sup>」之後追作歌二首」は使人たちが航海中に実際に詠んだ歌と見られるのに対し、6「属<sup>レ</sup>物發<sup>レ</sup>思歌一首ハ并短歌V」は使人たちが制作したものではなく、「実録」の資料をふまえつつ、遣新羅使人歌群をこんにち見るような形に仕立てた後の編者が、冒頭部と末尾部とを増補する際に歌群全体の主題を強調すべく書き加えられたものであることを明らかにした。

#### 四 題詞による脚色——天漢と月と望郷と

第二節・第三節において、書式を揃えた題詞と書式から外れた題詞とを比較しながら、それぞれの小歌群同士の関係を、歌の内容を絡めて考察した。同じ書式の小歌群が淡々と続く箇所は、題詞よりも個々の歌群を構成する歌の内容を理解することにより、各停泊地での一行の様子が浮かび上がるように工夫されている。一方、書式の異なる題



詞をもつ部分は、同じ書式の続く部分について今述べたような理解の仕方では済まない内容をもつ。その異なる題詞をもつ部分の内容はさまざまで、それゆえに題詞で強調されている内容を含めて歌群の内容を理解することが求められている。ただし、それは使人たち当事者の認識であるとは限らず、遣新羅使人の残した歌に対する編者の解釈が含まれていることを見落としてはならないであろう。そこに示された解釈は、個々に程度の差はあれ、「脚色」としての意味をもつつ歌群全体の意匠を凝らすことに通じる。

そこで本節では、題詞に編者の解釈が書き加えられたとみられる部分に注目し、小歌群単位での意味と、編者の解釈がめざしたことを考えてみたい。

\*

季節がら台風などの悪天候が続いたのか、あるいは前年冬から大宰府管内で天然痘が流行していたことにかかわるのか、使人たち一行はようやく「筑紫館」にたどり着いたものの、しばらく先に進めない状況が続き、筑紫館がある博多湾の周辺で詠まれたとみられる小歌群が並んでいる。題詞と歌を左に示そう（作者名が判明するものは歌番号下に示し、異伝は省略する）。

11 至<sup>二</sup>筑紫館<sup>一</sup>、遥望<sup>三</sup>本郷<sup>一</sup> 悽愴作歌四首

志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の辛き恋をも吾はするかも

(三六五二)

志賀の浦にいざりする海人家人の待ち恋ふらむに明かし釣る魚

(三六五三)

可之布江に鶴鳴きわたる 志賀の浦に沖つ白波立ちし来らしも

(三六五四)

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松蔭にひぐらし鳴きぬ

(三六五五)

12 七夕仰<sup>二</sup>觀天漢<sup>一</sup> 各陳<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>思作歌三首

秋萩にほへる我が裳濡れぬとも 君が御船の綱し取りてば

(三六五六) 大使

年<sup>一</sup>にありて一夜妹に逢ふ彦星も 我にまさりて思ふらめやも

(三六五七)

夕月夜影立ち寄りあひ天の川漕ぐ舟人を見るが羨しき

(三六五八)

13 海邊望<sup>レ</sup>月作歌九首

秋風は日に異に吹きぬ 我妹子はいつとか我を齋ひ待つらむ

(三六五九) 大使之第二男

神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひわたりなむ

(三六六〇) 土師稲足

風のむた寄せ来る波にいざりする海人娘子らが裳の裾濡れぬ

(三六六一)

天の原振り放け見れば夜そ更けにけるよしをやしひとり寝る夜

(三六六二) 「旋頭歌」

わたつみの沖つ繩海苔くる時と妹が待つらむ月は経につつ

(三六六三)

志賀の浦にいざりする海人明け来れば浦廻漕ぐらし楫の音聞こゆ

(三六六四)

妹を思ひ寐の寝らえぬに暁の朝霧隠り雁がねそ鳴く

(三六六五)

夕されば秋風寒し 我妹子が解き洗ひ衣行きて早着む

(三六六六)

我が旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢つく見れば

(三六六七)

14 到<sup>ニ</sup>筑前國志麻郡之韓亭<sup>一</sup>、舶泊<sup>ニ</sup>経<sup>ニ</sup>三日<sup>一</sup>。於<sup>レ</sup>時、夜月之光

皎々流照。奄對<sup>ニ</sup>此華<sup>一</sup>、旅情悽噫。各陳<sup>ニ</sup>心緒<sup>一</sup>、聊以裁歌六首

大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば恋ひにけるかも

(三六六八) 大使

旅にあれど夜は火燈し居る我を闇にや妹が恋ひつつあるらむ

(三六六九) 大判官

韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし

(三六七〇)

ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来ましを

(三六七二)

ひさかたの月は照りたり暇なく海人のいざりは燈し合へり見ゆ

(三六七二)

風吹けば沖つ白波畏みと能許の亭にあまた夜を寝る

(三六七三)

11は異国である志賀島の海人が生業に励む様子に好奇の視線を向けるとともに郷愁をかきたてられる前半二首と、現地的情景をうたう後半二首から成る。

ここで注意すべきは、題詞が言う「遥望<sup>ニ</sup>本郷<sup>一</sup>「悽愴作」の内容に四首すべてが対応するわけではないということ。「辛き恋をも吾はするかも」とうたう三六五二は本郷（故郷）への帰還を遙かに待ち望み、いまだ目的地の新羅に着かない苦しさを実感していることが明らかである。これに対し、三六五三には「家人」が出てくるけれども、「家人の待ち恋ふらむ」とうたわれたのは使人の家人ではなく海人のそれで

あって、家人が待っている様子を想像しながら、海人が夜を徹して釣りをする様子に見入っているという内容である。近世の注釈書には題詞との整合性を図った解釈がいろいろ試みられているが、一首の表現に即して解釈する限り、「明かし釣る魚」という一風変わった表現は海人の漁を注視する態度であって、その裏に故郷の家族が自分を思う心に思いをはせているというようには読み取ることができない。また、鳴きわたる鶴を読む三六五四について、『全注』はこの時期に鶴は存在しないとして後補の作とみなすけれども、使人が鶴（視界に入った鳥を渡り鳥のツルとみなして詠んだことも考えられる）を捉えてうたっていたと仮定した場合、博多湾の東の奥に位置する香椎の入江とされる可之布江に向かつて鳴き渡る鳥を見て、外海に接する志賀の浦の沖の浪を想像する内容であり、渡り鳥を捉えたからと言って直ちに望郷の念がかきたてられるとは考えにくい。

「ひぐらし鳴きぬ」とうたい、鳴き始めたことを表現する三六五五に出てくるヒグラシは時期から見てもツクツクボウシだとする東光治「蟬及びひぐらし考」の説は、直後に「七夕」に詠まれた歌群があることを考慮すると説得力がある。この説によるならば、本歌は、法師蟬の特徴のある鳴き声によって秋が近いことを知らされ、使人たちにとって妻（妹）と約束した帰還の「秋」が迫ってきたことを思い知らされる、という内容になる。これは題詞の述べる内容にかわつてくるであろう。

以上、個々の歌を表現に即して読み直すと、この歌群は、各歌とも、現地で使人たちの耳目に触れた異郷の景を、写實的に捉える点に特徴がある。そのうち望郷の主題を詠んでいるのは第一首（三六五二）と第四首（三六五五）のみで、中間の二首は、題詞の「遥望<sup>ニ</sup>本郷<sup>一</sup>「悽愴作」に対応していないようである。

そのように歌群の内容を網羅的に題詞が説明していないとすれば、周辺の歌群についても読み直しが必要になるろう。

12 「七夕仰<sup>レ</sup>観天漢<sup>レ</sup>各陳<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>思作歌三首」(三六五六〜八題)は、一読して歌の内容と題詞が一致していることが明瞭。重要なのは「七夕」(七月七日の夜)に詠まれていることで、11では「今よりは秋づきぬらし」と蟬の声によって感覚的に捉えていた秋が、暦の上でいっそう明確になっているのである。歌の内容をめぐっては、伊藤博「万葉の人格」の「大使の三六五六は純粹な七夕歌であるのに対し、大使の歌に導かれた三六五七と三六五八とは七夕を素材に借りた旅愁の歌」という理解で尽されている。この歌群については、題詞と歌の内容との間に齟齬はないと言ってよからう。

13 「海邊望<sup>レ</sup>月作歌九首」(三六五九〜六七題)は、「月ヲ望ミテ」とありながら、月を詠む歌がまったくないことで知られ、さまざまに説かれている。前半第四首(三六六二)の旋頭歌を除くと、「秋風は日に異に吹きぬ」(三六五九)、「神さぶる荒津の崎に寄する波」(三六六〇)、「風のむた寄せ来る波に」(三六六一)の表現から、激しく風が吹き波が荒く立っていることが窺えよう。ここで本稿が注視したいのは、大使の第二男および土師稲足の歌が、波や風を表現しながら妹(我妹子)に思いを馳せていることと、この小歌群中唯一の旋頭歌(三六六二)における「天の原振り放け見れば夜そ更けにける」という表現である。「振り放け見ル」は『全注巻第十五』によれば「視線を遠くへ押しやり仰ぎ見る表現」で、元来「儀礼的な場合に用いられた表現」だったものが、「一般的な表現として用いられるようになった」も、何か、そこに、自分から遠く離れているものへの一抹ながら強い憧憬の心情がうかがえる」と指摘する。また、「夜ソ更ケニケル」については、渡瀬昌忠『全注巻第七』一〇七一の【考】に、「い

ずれも、恋人と会えないまま夜がふけたことを嘆くのである。しかし、この歌(筆者注、山の端にいさよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜ぞ更けにける(一〇七一)をさす)はちがう。純粹に月の出が遅いのを嘆いている。恋人を待つように月の出を待つのである。」とあるのが参考になる。13の詠まれた海辺では、

一重山隔<sup>へな</sup>れるものを月夜よみ門<sup>かど</sup>に出で立ち妹か待つらむ

(七六五)

春日山おして照らせるこの月は 妹が庭にもさやけくありけり

(一〇七四)

この月のここに来たれば 今とも妹が出で立ち待ちつつあるらむ

(一〇七八)

などに見られる、離れている妹と同じ月を眺めるという発想の型が一同の間で共通に意識され、そのうえで月の出を待ち望んでいたであろう。九首のうち前半の四首までは共通する主題が展開していたが、第四首の旋頭歌(三六六二)が月を待つのはあきらめ、「それならそれで、夜を徹して宴を続けよう」(「釈注」)と呼び掛けてからの後半五首は、いずれの歌も焦燥感に満ちた内容が展開されている。結局、「海邊望<sup>レ</sup>月」とは、家郷で待つ妹と同じ月を眺めるであろうとの前提に立って、海辺で月の出を待ち望む、ということであったと考えられる。この「望」の用法は、現代語の「眺める」意ではなく、11の「遥望<sup>二</sup>本郷<sup>一</sup>」の「望」と「待ち望む」意で重なり、主題の連続を念頭に置く、編纂の段階で書かれた題詞であることを窺わせていよう。

14 「到<sup>二</sup>筑前國志麻郡之韓亭<sup>一</sup>、舶泊<sup>三</sup>経<sup>三</sup>三日<sup>一</sup>。於<sup>レ</sup>時、夜月之光皎々流照。奄對<sup>二</sup>此華<sup>一</sup>、旅情悽噎。各陳<sup>二</sup>心緒<sup>一</sup>、聊以裁歌六首」

(三六六八〜七三題)に移る。「船泊経三日」とあるものの、六首の歌から滞在日数を割り出すことはできず、これは当事者でなければ書けない内容である。

ところが、これに続く「時二夜月ノ光、皎々トシテ流照ス。タチマチニ此ノ華ニ対ヒ、旅情悽噎ス」とは、夜月の白々とした光をきっかけに旅情に悲しみ噎んだということで、此ノ華ニ対ヒとは月光の美しさに向き合つての意であるが、月光を詠むのは第四首(三六七二)・第五首(三六七三)のみである<sup>(4)</sup>。用語の上で能許・亭・波を共通にもつ第三首(三六七〇)と第六首(三六七三)が対応し、第三首から第六首までの四首は、大使と大判官が詠んだ前の二首を承けて作られている。「大君の遠の朝廷と思へれど」(「地方の侘びしい土地にいても、そこを『大君の遠の朝廷』と思つて、慰めてくれるけれど」(窪田『評釈』))と自らの公的な立場を意識しながら「日長くしあれば恋ひにけるかも」(「旅にある月日が長いので、都が恋しくなつてしまった」と望郷の念をうたつて見せた大使の第一首に対し、第二首は大判官が第一首の望郷の主題を、「旅にあれば夜は火ともしをる我を」(「旅の身でも、夜にはともし火のもとにいることが出来る私なのに」と即興的に、「闇にや妹が恋ひつつあるらむ」(「闇闇の中で、家の妻は私に恋ひ焦がれていることだろうか」と私事を詠んで展開させたもの。第三首以下の四首は第三・四首が「家に恋ひぬ日はなし」「家なる妹に逢ひて来ましを」と第二首に登場した家の妻への思いをうたつて、第一首からの望郷の主題を引き継ぎ、第五・六首が「海人のいざり(漁り火)」「沖つ白波」と、こちらは韓亭能許ノ浦の景を眺め現地の情景をうたいつつ、第六首では大使の第一首の「日長くしあれば」を承けて「あまた夜ぞ寝る」と望郷の念を滲ませてうたい収める。六首はこのように即興的に見事な展開を示す。特に無署名の第三首以下は比較的身分

の低い使人たちの歌だとすれば、その歌詠みの才能には並々ならぬものがあると言えよう。

ただし、この見事な展開をpushした上で注意したいのは、この歌会の最初から題詞に示す「月光」が出ていたわけではなさそうだということ。第一首から第六首まで、時間の経過と共に歌い継がれていったとすれば、題詞に示されるように、月光の皎々と照るさまがきっかけとなつてうたい始められたものではなく、少なくとも第三首目までは月光に一同の関心は向けられていなかったようである。とすると、この題詞は「船泊経三日」のように当事者でなければ書けない内容をもつ一方、全体の歌の場には合致していないことになる。

前後の歌群を見直してみると、10「佐婆海中忽遭逆風、漲浪漂流。経宿而後、幸得順風、到著豊前國下毛郡分間浦」。於是追怛艱難、悽惻作歌八首」(三六四四〜五一)の歌群の最後に月の歌が二首連続し、11「至筑紫館、遥望本郷、悽愴作歌四首」を挟んで、12「七夕仰觀天漢」と題して、月や星を「妻を偲ぶすが(抛り所)」と捉える歌が以下のように並ぶ。

ひさかたの天照る月は見つれども 吾が思ふ妹に逢はぬ頃かも

(三六五〇)

ぬばたまの夜渡る月は早も出でぬかも 海原の八十島の上ゆ妹が  
あたり見む (三六五一)「旋頭歌也」

11 至筑紫館、遥望本郷、悽愴作歌四首

「歌は省略」

12 七夕仰觀天漢、各陳所思作歌三首

秋萩にほへる我が裳濡れぬとも 君が御船の綱し取りてば

(三六五六) 大使

年にありて一夜妹に逢ふ彦星も 我にまさりて思ふらめやも

(三六五七)

夕月夜影立ち寄りあひ 天の川漕ぐ舟人を見るが羨しさ

(三六五八)

そうして月の歌をもたずに題詞に「海辺ニシテ月ヲ望ミテ作ル九首」と記す13の歌群へと続いていく構成の背景には、使人たちが冒頭の家族との別れの場面で、秋の帰還を約束して出発したことが大きくかわっているであろう。

時はすでに秋となり、しかもいまだ目的地・新羅にも到着しない。かかる状況のもと、七夕の歌を通して一年に一度の逢会を果たす幸牛・織女をうたった使人たちは、七日を過ぎてからは家で待つ妻を偲ぶ拠り所として月を求めたのであろう。実際、これより後に詠まれた、

ぬばたまの夜渡る月にあらませば 家なる妹に逢ひて来ましを

(三六七二)

天あまざか離る鄙ひなにも月は照れれども 妹ぞ遠くは別れ来にける

(三六九八)

などを見ると、月の出現が妻を偲ぶ契機になっていることが明らかである。

それゆえ、七夕詠の直後に月を待ち望む宴が営まれたのではなからうか。そして、14「到筑前國志麻郡之韓亭」、船泊経三日」。於レ時、夜月之光、皎々流照。奄對二此華一、旅情悽噎。各陳二心緒一、聊以裁歌六首」(三六六八〜七三題)の第四首(三六七二)において、よ

うやく月の光を見出した一行は、新羅に向けて玄界灘の航海を再開する。「月」を核にして航海の厳しさを表現すべく、「於レ時、夜月之光、皎々流照。奄對二此華一、旅情悽噎」と殊更に筆を費やすのである。

一連の題詞には、使人たちが残した歌稿群から編者が読みとった主題が強調されている。11〜14の一連については、帰郷について絶望的な状況に置かれた使者たちが家の妻を偲ぶ拠り所となる「月」のありようを書き加えることによって、悲劇性を浮かび上がらせるような「脚色」が施されていると読むことができる。

### むすびに

以上、おもに題詞を中心とする注記の書式に注目し、実録として残された使人たちの歌を基に、編纂の次元においてどのような方法でどのような内容が加えられ、遣新羅使人歌群という作品全体を通して何が表現されているのかを明らかにした。本論各節では時間の流れと空間の移動とふたつの側面が重要な意味をもつ歌群の特質を浮かび上がらせるべく、「題詞・左注の内容から見た遣新羅使人歌群実録部の展開」を押さえることによって、実録的部分がその内容から瀬戸内海航路・筑紫館・壱岐対馬に向かう玄界航路の三つに分けられることを突きとめた。そして、それぞれの部分における歌の内容と題詞・左注のありようとを読み比べた結果、「実録」としての性格を尊重しつつ、使人たちを襲った苦難を劇的に表現するための「脚色」が、主として題詞に変化を加えることによって行われていたことが分かった。

この結果をふまえ、遣新羅使人歌群を読み直すならば、題詞の書式が似通う部分については歌の内容を味わうことに努めることで、一行がたどった各地の情景が浮かび上がるようになっていく。航海の状況

が比較的順調な前半では、停泊地ごとの題詞の書式に大きな変化はなく、歌の内容を通して各場面の变化を察しめばよい。対して、題詞の書式や用語が変化する部分では、多くの場合、一行を襲った困難を伴う事情が付きまといっている。そのような部分では題詞の内容と歌の内容とをかわらせながら読むことによって、場面ごとの苦難の度合いを推し量ることができる。歌の内容と題詞の説明を読み比べることで使人たちの苦勞を、その時々苦勞の程度も含めて偲ぶことができるのである。

途中、逆風に遭って漂流する事故が発生してから筑紫館滞在にかけての部分では、各場面での様子を説明する題詞ごとに悲哀を表す語を書き加え、それらに変化をつけて、一行が抱き続けた旅中の悲哀が、あたかも変奏曲のように、小歌群単位でくり返し強調されていた。また、隣り合う小歌群の主題（全体を貫く題材）が異なる場合に、うたわれた歌の中から前後で共通する要素を抽出し、それを題詞に書き加えて関連づける方法が採られている箇所がある。特に、九州に入ってから、約束した「秋」の帰還が果たせないことが決定的となり、各場面で使人たちは時間の経過を嘆くとともに、妹（妻）への慕情をうたい続け、悲哀が深まっていく様子が描かれている。その際、歌以上に題詞の果たしている役割が大きいことを見落としてはいけない。

使人たちが残した歌稿記録を今見る形に編纂するにあたっては、6「属物發思歌一首（并短歌）」（三六二七〜九）など、編者によって書き加えられた作品もあった。この作品はうたわれている地名が一致することから、末尾の「家島五首」とともに編者によって加えられたとみられる。遣新羅使人として官命を帯びた一行であるにもかかわらず、新羅での出来事は一切記さず、帰途におけるさらなる苦難についても語らずに、家島に戻ってきた時の五首で一大歌群を終える。この

終末部の意味については、本稿の実録の部分における編集のありようを通じて、次のような見通しを導くはずである。——大使を志岐で喪い、副使大伴三中也途中で病に罹って拜朝が二か月ほど遅れる、悲惨な運命をたどったこの遣新羅使人たちの結末を知る享受者——当時の宮廷官人のみならず今日の読者も含めて——に對し、史実の背後にある使人たちの苦難を余すことなく伝えること。

遣新羅使人歌群における歌と題詞の連携した表現は、この目的を果たすための編者の工夫だったのであろう。

## 注

(1) 「構造分析」共時態（静態）分析」ならびに「資料編成分析」通時態（動態）分析」は身崎論文に示された用語。前者はテキスト外の情報を取り込むことをせず現行のテキストの状態を尊重するアプローチであり、後者はテキスト外の情報をも取り入れて編纂の営為自体に変化の相を捉えるアプローチを指す。

(2) 大伴氏の同族で、班田司の判官だった天平元年に、自死した部下を悼む歌（四四三〜五）を残している。

(3) なお、歌群末尾の「廻<sub>二</sub>来筑紫、海路入<sub>レ</sub>京、到<sub>二</sub>播磨國家嶋<sub>一</sub>之時作歌五首」（三七一八〜二二題／左注なし）（以下の論述では「家島五首」と略す）は、使人たちの詠んだものではなく、編者が歌群全体を作品化する際に補ったとする見方が一般に行われているが、論述の都合上、対象に含めて考察を行う。

(4) 『王朝文学の考証的研究』風間書房一九七三年・初出一九五五年

(5) 『国語と国文学』第三八卷第六号、一九六一年

(6) 『萬葉集考叢』宝文館一九五五年・初出一九五一年

- (7) 『萬葉集講座 第六 編纂研究篇』春陽堂一九三三年
- (8) 『国語と国文学』第三一卷第三号、一九五四年
- (9) 『萬葉作品考』和泉書院一九八四年・初出一九五七年
- (10) 『萬葉集の構造と成立』下、塙書房一九七四年・初出一九六八年
- (11) 『遊文録 萬葉篇一』和泉書院一九九三年・初出一九七二年
- (12) 『萬葉集への視角』和泉書院一九九〇年・初出一九八〇年
- (13) 『萬葉歌の主題と意匠』塙書房一九九八年・初出一九七八年
- (14) 注(11)に同じ。
- (15) 注(12)に同じ。
- (16) 『萬葉集の歌群と配列』下、塙書房一九九二年・初出一九八四年
- (17) 『万葉集の編纂資料と成立の研究』おうふう二〇〇二年・初出一九七八年
- (18) 注(6)に同じ。
- (19) 注(4)に同じ。
- (20) 『萬葉集大成 4 訓詁篇下』平凡社一九五五年
- (21) 注(12)に同じ。
- (22) 注(17)に同じ。
- (23) 『万葉集を学ぶ』7、有斐閣一九七八年、のち加筆して『万葉集成立新論』桜楓社一九八六年に収録。
- (24) 注(16) 前掲書・一八頁参照。初出一九八二年
- (25) 題詞本文の「狛」について「柏」の誤写と解する井上通泰「狛鳥亭」(『萬葉集雑攷』明治書院一九三二年・一三七〜九頁)の説によるべきか。
- (26) 13のみ左注形式をとることにについて、伊藤博「海辺にして月を望む歌九首」(注(16) 前掲書・初出一九八八年)は「三六六二の旋頭歌が録事自身の歌であることに由来する」可能性を指摘している(二四七

頁)。遺新羅使歌群中に三首ある旋頭歌がいずれも一連の歌の場における重要な位置で存在意義を発揮しているという指摘は肯されるもの、三六一の歌と脚注が録事によるものでないとは言えず、注記に閱してこれ以上踏み込んだ言及は困難である。

- (27) 長門島の比定地については、扇畑忠雄「萬葉集『長門島』考」(『国語国文』一九三五年一〇月号、のち『萬葉歌の詩法』おうふう一九九五年に収録)が研究史にも触れて詳細だが、八十年余を経過していることもあり、二〇一九年二月二〜三日、実地踏査を行った。島の中心部をなす本浦の東寄りに位置する桂ヶ浜には、桂浜神社とその背後の山林とを併せて「長門の島の小松原」を思わせる景観が広がる。『倉橋町史 海と人々のくらし』(倉橋町二〇〇〇年)には昭和二〇年代、三〇年代、一九九六年の本浦の集落を写した写真が口絵に掲載されており、この五、六十年の間の中心集落の建物や港湾の雰囲気の変遷が窺える。しかし、同書六〇〜一頁に掲載された享保八年(一七二二)の年紀が記載されている「安芸郡倉橋島本浦図」(友沢一雄氏所蔵)をもとにトレースした本浦の町割を見ると、集落は海に面しながら背後に山が迫る地形の、海に向かって拓けた複数の谷筋に沿って形成されており、中心市街地を除く自然の景観はほとんど変わっていない。また、倉橋島には島を東西に分かつ層が一本通っているが、その位置から見て、岩盤を露出した山頂を有し、桂ヶ浜の背後に聳える火山の景観は、大きく変わらなれと思われる。なお、当地で造船業が隆盛をきわめた近世期において、中心部を流れる川の東側、桂ヶ浜に向かう一帯がその中心地だったという(同書六六〜七頁)。倉橋島における造船業がいつ頃まで遡れるかは、決定的な資料に乏しく判断できないけれども、『日本書紀』推古二六年(六一八)から『統日本紀』宝龜九年(七七八)まで、都合九回にのぼる遣唐使船の建造を

命じる記事のうち、七回までを安芸国が占めているのは、暗示的である。

(28) 諸説については『全注巻第十五』参照。

(29) 注(13) 前掲書・三二〇頁参照。初出一九九四年

(30) 『萬葉集追攷』岩波書店一九三八年・四九〇頁参照。初出一九三三年

(31) 『萬葉論集第二』桜楓社一九八〇年・初出一九七八年

(32) 注(16) 前掲書・二八頁参照。初出一九八四年

(33) 注(12) に同じ。一〇八〇九頁参照。

(34) 『文彩』第五号、二〇〇九年

(35) 『続日本紀』天平八年十月戊辰条によればこの年一旦終息を見たように書かれているが、使人のひとり雪宅満が壱岐島で亡くなったのは、流行していた疫病に感染した可能性も考えられる。

(36) 望、出亡在外、望其還也。(『説文解字』第十二下、亡部)

(37) たとえば、『代匠記』は「われらは勅を承はりたる身なれば、事おはるかきりかへる事あたはず。あまは身を心のまゝにするを、魚をつるに心をいれておのか家なる妻どもの待こふらんことをもおもはぬよと、わか身のうへよりよめるなり」(初稿本)と言い、『萬葉童蒙抄』は「只あかしつるをと云義に、うの言葉を助語に入れて、句を整へたるならん」としたうえで、「おのがわざわざ我身もはるばるの海路を経て、かく使を勤むる事も、其身の家業に等しかれば、あまのしわざをも思ひ合せて、感情を催したるならん」、『萬葉考』は「海人の家人の待恋るをいひて、古郷人の恋るころをよめるなり」と解釈、『略解』は「夜も帰らずして、燈を明くともして釣すると言ふなり。我は詔によりて、事終へぬ限り、家に待ち恋ふる人有りともえ帰り難きを、海人は己が心のままなるに、家人の待つらんをも思はぬ事よと、我が上より

詠めるなり」(傍線は筆者による)とあって、『代匠記』とほぼ同じだが、家人が自分の帰りを待ち恋うているということ(破線部)をより強調する。

(38) 『萬葉動物考』人文書院一九三五年・四〇四〇五頁。初出一九三四年

(39) 注(16) 前掲書・五八頁参照。初出一九八八年

(40) なお、注釈書のうち、『私注』・『全注』は「奄」をタチマチニとは訓まずヒサシクと訓み、第一首を題詞と関係づけて理解するが、第二・三・六首が月とはかわならず、「對此華(此ノ華ニ対ヒ)」の部分と対応しない。